

2020年7月16日 IASP : International Association for the Study of Pain (IASP) は痛みの定義を “An unpleasant sensory and emotional experience associated with, or resembling that associated with, actual or potential tissue damage” と改定したことを公開しました。PAIN: May 23, 2020 - Volume Articles in Press - Issue -doi: 10.1097/j.pain.0000000000001939

現在まで使われてきた旧 IASP の痛みの定義（1979年作成）は痛みの医療者や研究者のみならず国や WHO などにも認められてきました。しかし、科学分野を含めて広い意味での痛みの理解の進歩が進んだことを受けて定義自体の再評価・改定の必要性が指摘され、2018年から改定に向けた IASP の Pain Definition Task Force（座長：Srinivasa Raja 教授（Johns Hopkins 大）、日本からはメンバーとして牛田委員が参画）が構成されました。2年間に及ぶ改定作業では広くパブリックコメントを求めたり、哲学者などの意見も取り入れるなどが行われ、上記の新定義が確定しました。旧定義で特に問題となったのはそれが“多様な心と身体の相互作用について重んじていないこと”や倫理的な面から痛みを表現できない新生児や高齢者やヒト以外の生物などの問題が無視されているという点です。また、新しい定義が、神経障害性疼痛や Nociceptive Pain などの概念をも包括すること、わかりやすい言葉であることなども重視されました。

さらに、定義の主文中に記しきれない内容が、以下の6項目の Note（付記）として加えられました。

- Pain is always a personal experience that is influenced to varying degrees by biological, psychological, and social factors.
- Pain and nociception are different phenomena. Pain cannot be inferred solely from activity in sensory neurons.
- Through their life experiences, individuals learn the concept of pain.
- A person's report of an experience as pain should be respected.*
- Although pain usually serves an adaptive role, it may have adverse effects on function and social and psychological well-being.
- Verbal description is only one of several behaviors to express pain inability to communicate does not negate the possibility that a human or a nonhuman animal experiences pain.

上記の改変を受けて IASP の Chapter である日本疼痛学会の理事を中心としたメンバーでは、痛みの定義の正確な運用と普及を進めるため、新定義と Note の日本語訳を作成し、下記の翻訳を理事会として承認しました。なお本翻訳は IASP のホームページでも公開予定です。

痛みの定義 2020 日本語訳（日本疼痛学会 2020.7.25）

「実際の組織損傷もしくは組織損傷が起こりうる状態に付随する、あるいはそれに似た、感覚かつ情動の不快な体験」

付記

- 痛みは常に個人的な経験であり、生物学的、心理的、社会的要因によって様々な程度で影響を受けます。
- 痛みと侵害受容は異なる現象です。 感覚ニューロンの活動だけから痛みの存在を推測することはできません。
- 個人は人生での経験を通じて、痛みの概念を学びます。
- 痛みを経験しているという人の訴えは重んじられるべきです。
- 痛みは、通常、適応的な役割を果たしますが、その一方で、身体機能や社会的および心理的健康に悪影響を及ぼすこともあります。
- 言葉による表出は、痛みを表すいくつかの行動の1つにすぎません。コミュニケーションが不可能であることは、ヒトあるいはヒト以外の動物が痛みを経験している可能性を否定するものではありません。

※今回の翻訳においては誤った解釈を避けることが最も重要と考え、言葉の選択と配置の検討を行いました。特に、重要な部分として痛みは不快な（感覚かつ情動の）体験という事を明確にさせるべく、語順を“感覚かつ情動の不快な体験”としています。

（文責：野口光一、加藤総夫、矢吹省司、大鳥精司、住谷昌彦、牛田享宏）